

A night scene at a Japanese shrine. In the center, a traditional red torii gate stands on a path. To the left, a stone wall with a thatched roof is visible. The scene is illuminated by numerous glowing green and yellow lights, creating a magical atmosphere. The text "SAIHIKA 201708" is displayed at the bottom in a glowing green font.

SAIHIKA 201708

SAIHIKA201708

「ハア、ハア……クソッ、一体何が起きている!？」

走る。ただ闇雲に足を動かして、少しでもその恐怖から離れようと。

追いつかれたら。そんなことを考えている場合ではないのに、脳裏をよぎるその光景に足がすくみそうだった。

「待っているのは死……! 間違いなくッ……!」

休息を求め、痛みをもって助けを乞う両足。限界は近い。

「クッ、マズい!」

背後から複数の足音。間違いなく、王国の民だ。

「……ッ! ……」

遮蔽物を間にしたすぐ近くから叫び声が聞こえる。どうやらこちらを見失ったようだ。

状況は最悪。それでも、まだ諦めるには早い。

「帰らねばならぬ家がある。待っててくれる人がいる。彼女の“声”を聴くまで、俺は死ぬわけにはいかねえ!」

息を整え、また走りだす。僅かの休息だったが、もう少し頑張れる。

……その時だった。

「~~~~~ッ」

偶然にも携帯に着信が。彼女の歌声が響く。これ以上ないって程に最悪のタイミングだった。

「見つけたぞ邪教徒だ!」

困まっている。いよいよ最期が近い……。ついつい、文句の一つも言いたくなってしまう。

「俺が、俺が何をしたって言うんだ……。ただ本当のことを言っただけじゃねえか。「でも、実際は四十超えてるよね」って。だというのに、この国のヤツら……!」

そして、一斉に魔の手が伸び――。

「……………ハッ!? なんだ、夢か。先週のラジオ聞き直そうっと」

俺はPCを立ち上げた。

完

表紙 : SAIHIKA201708	表紙	鵜和	1
目次 : SAIHIKA201708	目次	マウス	2
小説 :			
キュウセイの魔女とその騎士		マウス	3
余生は潰えた物語の上で		T.K	13
愚人、ヤコブソンを嗤う		矢野ヒカル	19

キユウセイの魔女とその騎士

〜リフロンティアと矢印大陸の動乱

マウス

傍で寝息を立てるアデルを尻目に、ノエルはベッドから立ち上がった。

「……豪華すぎて逆に寝付けねえ」

住み込みで働いているアトリエ屋根裏の固いベッドや、あるいはつい最近利用していた、揺れる客船の寝台に比べるとあまりにも質感が違う。ノエルはベッドに手を置いて小さく呟いた。

「これ幾らするんだろ？ アデルは気にならないのかな」

豪華な寝台に横たわるアデルの姿は、さながら眠れる姫君のようである。同性のノエルから見ても実に様になっていた。

「……同じ田舎の村出身でこの差。一体何故なのか」

しばらく自身の身長や胸元を気にしつつ溜息を吐く。

「マキナのやつ、起きてるかな？」

二言目には想い人の名が口をついて出たことに、彼女自身驚いて一人赤面していた。

「いや、挨拶するだけ？ みたいな。眠れなくて暇だから話し相手欲しいとかさ、そういう……ね？」

誰に向けられたものでもない言い訳を一人繰り返す内、部屋にあった鏡に映る自身と目が合った。

「さっさと行けと？ 分かった、分かったよ。行くさ、行ってやるとも！」

鏡に映る自分を一瞥し、ノエルは部屋を出た。闇に包まれた屋敷をそそくさと進む。

「うわあー雰囲気あるなあ。なんか化けて出てきそう……道、合ってるよね？」

夕方に別れた時の記憶を頼りに進んできたが、一抹の不安を抱えたままノエルは歩いていた。

「ティリア様、いかがなさいました？」

「のわあああああああああつ！」

暗闇の中の突然の声にノエルは思わず飛び退いていた。

「すみません、脅かせてしまいましたね」

声の主は、昼にノエルらの身体を測っていたメイドだった。

「は、ははは。いや、少し寝付けなかったんで、マキナが起きてるなら話でもしようかなと」

ノエルがそう語ると、メイドは僅かに何かを考えこみ、その後口を開いた。

「マキナ様の自室はこちらです」

「あ、そうだったんですか。……ん？ 部屋の前で何を？」

「あの方の安眠を守るために警護しておりました。少し前に、良からぬ輩の侵入を許しました故」

そう聞かされて、ノエルは彼が元々家を出た理由を思い出していた。過激な宗教組織に襲撃された、と。

「ですが、現在マキナ様は外出されております。お話でしたら、その……中庭の方へ」

メイドはしばし逡巡しているように見えた。

「警護はいいんですか？」

「起きておられるなら、我々に出来ることはなにもありませんのでなるほど、とノエルは納得した。勇者の家系に連なる主人たちの方が武勇に優れているのは、語るまでもない。無防備な就寝中のみ守る必要があるのだ。」

「マキナ様には一人にしてほしいと言われましたが、ご友人のあなたなら——」

メイドが悲痛そうな表情を浮かべているのに、ノエルは困惑した。

「あ、えっと」

「……申し訳ありません、見苦しいところをお見せしました。どうか、ご友人のあなたから。私では、あの方にかける言葉が見つからない」

メイドがどうしてこんな表情をするのか。マキナが何に苦しんでいるのか。ノエルには何も分からなかった。けれど——

「私に、出来ることがあるなら」

静かに頷いて、彼女は歩き出した。

銀夏も半ば。日中はよく照った日差しで暑くなるが、夜はまだ涼しさを感じさせる心地の良い風が吹いていた。

この中庭では、吹き込んだ風が花々を揺らし甘い香りが鼻を楽しませる。

そんな花園の真ん中で、マキナは一人立っていた。

「……いい夜だ。夜風と花と星空と。君はどう思う？」

「……………」

「君に聞いたんだ、ノエル」

「そう、だったの。……私も、素敵な夜だと思う。ここの花も……ういナリイでしょ？ 私の一番好きな花だよ」

彼の傍らには、外からは見えなかった墓標が一つ。

「聖教が認めていない勇者の存在を許さず、排除しようとした過激派の集団があった。レンカート家の屋敷を襲った彼らだったが、家主であり現東の勇者であるエリジナ・レンカートや使用人たちの手により撃退された」

「え？ でも、被害はなかったって——」

目の前の墓標を見つめながら、ノエルが驚いたように言い淀む。

その一件によって、彼ら家族は分かれて行動することとし、マキナにも東の間の自由が与えられた、と。ノエルが知る限りの情報はそれだけだ。

「それはそうさ。ここにいる彼女もまた、過激派集団の一人に数えられたんだからな」

そう言ったときの彼の目を見て、ノエルはどうしようもなく心が締め付けられる感覚に陥った。その瞳は、彼女も、花々も、この世界さえ。何一つ映していないような気がしたから。

「彼女が家にやってきたのは、俺が5歳の時だったかな。彼女は移民だった。なんてことはない、この街ではどこにでもいる人々の一人。両親と、二人の弟妹がいた」

マキナは静かに語り始めた。透き通るような彼の声に、ノエルはただ黙って耳を傾けた。

「親に染をさせるため。その思いで職を探した彼女だったが、全く運の悪いことに俺の母親の目に留まっちゃってな。曰く、『眼を見て決めた』そうだが、どこまで本当のことだか。実際、移民になる前はそこそこ裕福な家で育ったらしく、文字の読み書きなんかも出来て優秀だった。結構抜けているところもあったけどな」

思い出話に花を咲かせながら、もういない彼女に向けて笑いかける。「使用人として働いていたけど、俺にとっては仲のいい姉みたいな存在だったな。悩みを相談してもさ、上からもの言ってくる大人たちと違って、いつも一緒になつて考えてくれた」

「——ツ」

ずきずき、と。自分自身でも気付かないうちに、ノエルは胸を手で抑えていた。痛みは消える気配がない。

「外の世界に、冒険者に憧れていることを初めて打ち明けたのも彼女だった。応援してくれたよ。世界中を旅して、色んな土産話を聞かせると約束した。……馬鹿みたいだよな、この家から出られるはずもないのに」

「——あ」

約束という言葉に、ノエルが強く反応する。偉大な冒険者になったらという夢。ノエルが彼と交わしたものとよく似ていたからだ。

「彼女がこの屋敷で働いていると、どこからか知った悪党共がいた。奴らはレンカートの一族がどうにも気に入らないらしく、ずっと貶める機会を窺っていたそうだ。奴らは彼女の家族を人質に、屋敷への手引きを要求した。断ることは……出来なかっただろうな」

どんな形であれ、襲撃者を守るべき主の下へ導いたのは事実だ。汲むべき事情があつたにせよ、純粹な被害者とは呼べなくなってしまうた。

「だが、彼女は最後、悪党に一矢報いようとした。後日、母が組織を潰して吐かせたらしいが、元々奴らは母に勝てないと分かった上で、不在の日に血族の俺や妹を始末しようと考えていたそうだ。けれど実際には、暗殺者の大半は母に返り討ちにされた」

「彼女が、嘘を吐いたから？」

「……真実は闇の中だ。一使用人の彼女が、母の正確な予定を知っていたとは思えない。たんなる偶然だったのかも。……でも」

答えの出ない問いを前にして、マキナは弱々しい声音で言った。その姿を見たとき、ノエルは咄嗟に叫んでいた。

「偶然じゃないッ！」

彼女自身、驚くような勢いで啖呵を切る。

「たった、たったこれだけの話を聞いただけでも分かる！ 彼女がどれだけ聡明な人だったか！ 優しい人だったかッ！ アンタを守るために、命を懸けた嘘を吐いたんだ……。アンタが信じなくてどうすんのよバカあ……」

ぐっと拳を握り締め、返答も待たずに捲し立てた。ただ、ありのままに感じたことを。

「……ああ、全く。その通りだな。でも、それを口にしたら——」

しばらく押し黙った末に、マキナが口を開く。

「彼女はここで、倒れていたんだ。騙されたと知って逆上した暗殺者に斬られ、体は血に塗れていた。父さんでさえ、どうにか出来る状態ではなかった」

「……そう、だったんだ」

「ここに彼女はいない。たとえどんな手段を用いても、もう帰ってくることはない。魂が消滅したんだ」

何かを悟ったように、マキナは墓標に手をかけて、静かに言った。切なくも優しい声音だった。

長い長い沈黙の果てに。

「彼女のことが好きだったの？ その……女性として」

ノエルが口にした言葉にマキナは目を丸くした。その後、しばらく考えるように俯いて、言った。

「どうなんだろうな。よく、分からない」

「……………」

「でも、多分だけど……違う。彼女を尊敬していたし、好いていた。いなくなつて涙を流した。けれど、それはきつと……家族へ向けるような親愛だった」

心つてのは、そんな簡単に割り切れるものでもないけどさ。と、彼は最後に付け加える。

その時、ノエルは一つの感情を覚えた。

「……ああ。今、すつごくサイテーなこと考えた」

そして、そんな自分をたしなめる様に独りごちた。

「最低？」

「ちよつと話過ぎたかな？ 朝がキツくなるし、もう寝るよ」

「おい、今の——」

「私はさ」

ノエルは部屋に戻ろうとして、一瞬だけ振り返り向いて言った。

「私は、あんたが死んだら、泣くよ。絶対泣く……それだけ」

彼女はもう、振り返らなかつた。

「聞いていたんだろ？ メメ」

一人だけになった中庭で、マキナは小さく呟いた。それに反応して、マキナの脳に直接声が届けられる。

『……故意ではなかつた。すまない』

「別に咎めるつもりはないさ。こちらから尋ねるつもりだった」

『そうか。それで、彼女のことだが』

「……死んだ身だから分かる。ここに彼女はいないってさ」

『何の残滓も残っていない。死してすぐ消えていった証拠だ。彼女は自らの死を満足して受け入れた』

「あんな、理不尽な終わり方をしたのにか？」

『幸福とは、他の誰でもなく己自身が決めることだ。他者には図れないものだよ』

「……まだ、一番の悩みを相談出来ていなかったのにな。きつと、あなたにはお見通しだったろうけど。もう少し、早ければ……」

『……生き返ったこと。後悔はしていないか？』

「まだ、するべきことが残っている。それに、こんなにすぐに来るんじゃないって、彼女に怒られるところだったからな。メメとアデルには感謝している」

『……そうか』

「ああ、そうとも」

しばし静かな時間が流れたが、突如何かに気付いたようにメメが言い出した。

『それはそうと。ノエルという娘、彼女に少し似ているな』

「そんなことまで分かるのか!? あ、いや」

『眠る骨とその遺伝子から、な。何をそんなに慌てている?』

「いいや、別に慌ててなどいない」

『まあいい。もう遅い、君も寝たらどうだ?』

「言われなくともそうするさ。……本当に慌ててないからな」

マキナも去り、残されたのは小さな墓標だけ。その前には、小さく白い花が供えられている。周りに咲くものと同じそれは、墓の主である女性が、一番愛した花だった。



窓から差し込む光が、ノエルの意識を深層の泥濘から掬い上げた。

「んっ……うん」

いつものようにベッドから飛び出ようとして、伸ばした足が外に届かないことに気付く。

「でけえ……」

体を持ち上げるのも億劫なので、体を数回捻って転がり出た。

ベッド脇の机には、ご丁寧にも桶に入った水が置かれていた。これで顔を洗えということだ。

「ひゃっ!? ちべたい……」

冷水で眠気をふっ飛ばしたところで、周りを見渡す余裕が出来た。

「あれ、アデルがいない。それに……え、こんな時間!? やっぱ夜更かしし過ぎた……」

夜更かしと言えば勿論中庭での一件である。思い返しながら、ノエルは頭を搔く。

「勢いに任せて色々ぶちまけちゃったな。まあ、でも、うん。間違ったことは言っていないはず」

そう言いながら部屋を出て――

「おはようございますティリア様」

「のわああああああああああっ!」

昨晚と同じように飛び退いた。

「申し訳ありません。一度ならず二度までも」

「いえ、こちらこそ芸もない驚き方を……」

どこかズレた返しをするノエルに笑いを堪える様子を見せるメイド。マキナの部屋の前で話した女性だった。

「キンゼイよりご案内するよう仰せつかりました。朝食を用意させていただきますが、食堂でお召し上がりになりますか？ それともこちらに運んだ方がよろしいでしょうか？」

「その前にアデルはどこに行ったか聞いてもいいですか？」

「アデライーデ様でしたら先に朝食を済ませて、今は邸内の畑で農作業をなさっています。身体を動かしたいとご本人の希望で」

「……ホントどこにいても我が道を行ってるなあ、あの子。尊敬するわ」

「あ、そうでした。マキナ様よりテイリア様に、数冊の書を預かっております。錬金術に関するものだと」

「そういえばそんな話もしました。じゃあ、朝食はここで食べてもいいですか？」

「畏まりました。では、書と一緒に持ちします。それと——」

立ち去り際、メイドが深々と頭を下げて言った。

「昨晚は、本当にありがとうございました」

「いえ、私は何も……」

「お二人がどのようなお話をしたかは存じません。ですが、今朝の方の表情が、ここに来た時よりも明るくなっていたと感じました」

「そう、ですか……。私なんかお役に立てたなら嬉しいです」

それでは、と一言残してメイドが去っていく。

「あの！ その本人はどこへ？」

「マキナ様は大公の下へ。私は詳しいことを聞かされておりませんので、それだけしか……。そういえば、アデライーデ様の杖を借りて外出なさいましたね」

メイドが去った後、ノエルは廊下の真ん中で考え込んだ。

「杖……？」

芋づる式に近い記憶が思い起こされていく。

「台風が過ぎ去った後の日。マキナがギルドに呼ばれた日もそういえばあの杖を……。何か、特別なもの？」



「よく来たな、シルメリア・フロウライト。いや……本来の名で呼んだ方がいいかな？」

「好きにして下さい。こちらの素性は知っての通りだ」

ここはイルミナにそびえ立つ鉄壁の要塞、オールドネア城の中枢。全てを視る者が座す城主の間。

「では、マキナと呼ばせてもらおうか。君の母にはよく働いてもらっているよ」

「……そうですか。あの人は、仕事の話を全然しないので」

その人間、あるいは非人間は全身に鎧を纏い、兜の向こうの素顔を知る者は限りなく少ない。

「ここは単なる儀礼の場だ。私がクラスSとなる者の性質を理解しておくための場。……通例であれば、な」

「……どういう意味です？」

その男、あるいは女の声は無機質で平坦。何かしらの術で調律された声音はその正体を掴ませない。

「なるほど、その杖が死者を蘇らせるという一品か」

その若者、あるいは老人の名は大公ヴラド。イルミナ、ひいてはこの東大陸を統べる絶対的覇者であった。

「ええ。報告を受けているはずでは？ 僕がこの杖の力を借りて竜を退けた。そう聞いたでしょう」

慌てることなくマキナが返す。なにかしらの詮索が入ることは想定内の範囲内。当然だ、終わった生命を取り戻す力など、全ての人間が一度は望む秘術である。

「古の勇者の軍勢を蘇らせ、先頭に立つ君は勇者の子孫。そして対峙するは神話に聞く巨大な竜。まさしく伝説の再演だ」

賞賛するように、ヴラドが手を叩いて言った。その感情のない声は聞く者に畏怖を与える。鎧の向こうの瞳が全てを見透かしているように感じさせる。

「さて、単刀直入に聞こう。君はその聖装、廻杖メモントモリの主ではないな？」

マキナは、後退りしようとする両足を理性で抑え付けた。

「何を言っているのやら」

「ふむ、知らぬ存ぜぬか。当たり前だな、君は誰かを庇うつもりなんだろうから……では、来たまえ」

ヴラドは玉座から立ち上がると、マキナを背後の部屋へと招いた。

「これなるは天眼の間。全てを見渡し裁く場である」

そこでマキナが目にしたのは、まるで理解の外にある景色であった。

「この動く絵は……地上か！？」

部屋の中では、無数の景色が宙に映されていた。それぞれが違う場所を描き、そしてその中で人々が動いているのが見て取れる。

「丁度仕事が入ったところでな。ここから北方、小国間の国境線で諍いが発生している。放置すれば今にも全面的な戦に発展するだろう。そしてこれはフォウハルトにおける規約違反、宣戦布告を用いない戦闘行為に当たる」

ヴラドが一枚の映像に手を伸ばすと、彼らの目の前でそれが拡大して表示された。マキナはそれを食い入るように見つめ、信じられないといった面持ちで呟いた。

「まさか……これらが全て、今どこかで起きている現実だと?」

「そうだ。そして私には人々の過ちを正す責務がある」

ヴラドは部屋を中心に鎮座する、一振りの槍に手を伸ばす。それを掴み、そのまま部屋にあるもう一つの戸に手をかけた。

「大公の空中廊下……! ここから繋がっていたのか」

強い日差しと風が部屋に入り込む。扉の先には、バルコニーと呼ぶには細長い、柵も手すりもない廊下。視界の先にはイルミナ全域が広がっており、一歩足を踏み外せば遙か地表に叩きつけられるだろう。

「私が下す審判の力。その正体を知る者は少ない。君もこれからその一人だ」

ヴラドが槍を片手にもう片方の手をかざすと、巨大な図が現れる。彼はそのうちのある一点を槍で突いた。

「大陸地図か。いや、こんな精巧な物みたことが……」

『座標の固定化が完了しました。最終確認を行います』

「ヴラドがこれを許可する」

『確認が完了しました。粒子砲を発射します』

少しの間を置いて、視界の彼方で光が瞬くのをマキナは見た。慌てて部屋に駆け込み、映像を確認する。

「死者は数十名に抑えられたか。致し方ない犠牲であった」

地形には大きな窪みが生まれ、一帯の地面は黒く焦げついていた。

「こんな、バカげた力が——!」

「よく似た力が、君の手の中にあるのではないか」

マキナの耳には、平坦なヴラドの声音が笑っているように聞こえた。

「凱角レイディア。今君が持つメモントモリと同種の存在である」

「ハッ! 任務は滞りなく達成されました、我が主!」

一人の少女が、ヴラドの前に現れる。直立で背筋を真っすぐ伸ばし、手の平を下向きに額の前で止めた。彼女なりの敬礼だろうか。

「彼女の力で、私はこの大陸で起きる全てを見渡す。そう、あの日も」

「……………ッ!」

マキナが強く歯を食いしぼる。彼の言葉が真実なら、もはや何一つ隠し通すことは叶わない。

「クソッ。結局俺は何も出来ないのか……！ 何も…何者にも」
悲痛な叫びが虚しく響いた。

「あの日、確かに君は竜を退けた。だが、それは君だけの力ではない。君と、勇士たちと、もう一人いたはずだ」

続く

「馬鹿な。仮にあの戦いを覗いていたとして、あんな映像から正確な人数を割り出すなど不可能でしょう」

「出来るさ、人一人の単位で細かく見ることが出来る。それに、だ。君は大前提として大切なことを知らないようだな」

「……なんです、それは」

「聖装は純粹な人間では決して扱えない。君の家系は古くより名があり、それ故に断定出来るのだ。その血に一滴の濁りもないことを」

「なんだよ、それは……。じゃあ、あなたは……彼女はッ！」

「それを知って、君はこれからも彼女……アデライド・ウェールズの傍にいられるのだろうか？」

「……どういう意味だ？」

「話は終わりだ。では……今夜、また会おう」

ヴラドが魔力による合図を送ると、部屋の外から衛兵が入室してきた。もはやこれ以上の回答は無用とばかりに、彼はマキナに背を向ける。諦めて退室する他なかった。

余生は潰えた物語の上で

「ク

「スイハは賭けに出た。肉体と精神を、全部魔力の燃料にしたの。それをヒビナに託して、彼女は消えた。この世から、完全に」

静寂が森を包む。パチパチと火の粉の弾ける音だけが、シファアの耳にしつこく残る。

「そこからは私も知らない。神気が尽きて、身体が消滅しちゃったから」

「そんな……」

シファアは愕然とした。ソルが違う方を向いていて良かったと、心から思うほど、自分が酷い表情を浮かべているとわかっていった。

「それでは……お父様は、兄様は、魔神の秘密とは……っ！」

「シファア……？」

拳を握りしめ、我を忘れて声を荒らげるシファアに、ソルが心配そうに声をかける。はっとしたシファアは、胸を抑えた。

「……すみません、忘れてください……」

「うん。わたしがきえちゃってからののはなし、してくれる？」

「消えてからの話……そうですね。私の知る範囲であれば。えっと、それからヒビナさんは勝ったんです。一昼夜に及ぶ、長い戦いの末に」

話の続きを望むように、ソルは黙り込む。シファアは小さな背中に向かって話し始めた。自分を氣遣って話題を変えてくれたのだろうか。それとも、全て見透かされてるのだろうか。ソルの考えていることはシファアにはわからなかった

が、気持ちはずっとだけ紛れた。

「そして……人々はヒビナさんを称賛しました。魔物や離反した魔法使いを倒し、魔法使いたちの王の元へ、万を超える軍勢が辿り着こうと、薙ぎ倒されたこともある……そんな悪鬼を打倒した英雄として」

「おかしい」

「え、えっと……何がでしょうか」

急にくるりと寝返りをうち、自らの方へ向き直るイルに、シファアは少し戸惑う。見つめると息が止まるような感覚を覚える目は閉じているのだが、如何せん顔が近い。

「こんなもりのおくにすんでる」

「それは、ですね」

「うん」

「人々が抱く英雄像に、ヒビナさんが応えられなかったからです。最も重要なことは、魔法使いたちの王は死にましたが、その下に連なっていた軍勢が壊滅したわけではないということですよ」

「ざんとうがり？」

「はい。組織だった動きがなくなって対応が楽になったにも関わらず、人々は常にヒビナさんに助けを求めたんです。そうすれば、どれだけ強い魔物相手でも死者が出なくて済む、ということを知ってしまったから……」

「ナいてー」

「そうですね……ごめんなさい」

「む。……しふあはわるくない」

ソルは、まさかシファアがそういう反応をされると思っておらず、慌てた。そう

が遅かったせいで人が出始めて、あとはもう止まらなかった」

「それで、やめたんだね」

シファはこくりと頷いた。

「戦争終結から二年後、ヒビナさんは完全に姿を晦ましたんだって。ただ、ごく一部のヒビナさんと親しかった人が、本当に必要なときだけ力を借りてたらしよ」

「なる、ほどー……」

ソルは常に目を閉じているのでわかりづらいが、どうやら眠たくなってきたようだ。ふわふわした喋り方に、さらに磨きがかかっている。シファも日中にティグルスと戯れた疲れから、眠気はずつと感じていた。

今度はシファから、ほとんどソルとくつつくように近づいた。

「おやすみ……」

どちらからともなく、小さくそう呟くと、少女二人は並んで眠りに落ちた。

★

「ん……」

まぶたを閉じていてもわかる光に、シファの意識は急激に表層へ呼び戻された。けれどそれはきつかけでしかなく、鼻を突く獣臭に、はっと目を覚ます。

ソルと一緒に寝ていることによる安心感が災いしてか、すぐ傍までにじり寄っていたティグルスに、シファは全く気が付かなかった。

一方、死をも覚悟する状況に冷や汗を浮かべるシファとは対照的に、ソルは完全に寝ていた。ティグルス程度の魔物など、眼中には無いのだ。起きる必要

性を一切感じていない。

ソルは放置していても大丈夫だとわかっているが、シファはどうしても彼女を置いて逃げることをしたくなかった。

「Kanyo Byro」

二人の真下の地面を、木々より高く押し出す。その勢いで森の上空を放物線を描いて飛ぶ。滞空時間を伸ばすため、落下を緩やかにするための風が下から巻き上がる。

「ソルちゃん起きて！ おーきーてー！」

昨夜の少しの夜更かしと寝起きが重なり、シファは修行のことなど忘れてソルを起こして逃げようとした。空中で手をぶんぶんしてみるが、起きる気配がない。

それもそのはず。ソルはヒビナから譲り受けた神気を節約して使ったため、普段から活動時間を制限して基本的に寝まくっている。夜更かしたのはソルも同じなので、本当にソルの身に危険が及ばないと起きない仕様になっていた。

二人は鳥系の魔物に襲われることもなく快適な空の旅を満喫した後、森に落ちた。

「……うう、悪化した……」

まさかソルが起きないとは思っていなかったシファは落下地点まで予測していなかった。がさがさと木の葉を突き破って落ちた先は、運が悪いというか何というか、ティグルスが縄張り争いをしている真っ最中で、つまり——周りをぐるりと四匹のティグルスに取り囲まれていた。彼らの凄まじい雄叫びが木霊する。

ソルが冷たい地面を枕に熟睡する中、仲間内で争っている最中に乱入してき

た異物を排除しようと、極度に興奮したティグルスが一齐に飛びかかる。

「KVC 0041」

初めてヴェイエルラ樹海に挑んだころのシファであれば、為す術なく殺されていたが、今は違う。二ヶ月の間、レレミアとヒビナに修行をつけてもらったのだから。

二人を囲むように、外側へ向かって斜めに土の壁が形成され、そこから無数の鉄針が生える。

牽制されたティグルスは四匹とも飛び退いたが、その内一匹だけがシファの頭上目指して飛び上がった。シファの背丈の三倍はある壁を悠々と飛び越えて、真上から攻撃をしかけてくる。

かかった、とシファは思った。

「mov 010」

先程よりも鋭く長い鉄針が、シファの足元から伸びる。先端は確実にティグルスを捉える。はずだった。

ティグルスは右前足をわざと鉄針に突き刺し、急所を避ける。そのまま左前足の爪でシファを切り裂いた。

血が出ない。軽い音を立てて碎け散るシファの姿に混乱したティグルスが地面に降り立った時にはもう、勝負はついていた。

「pd」

シファはティグルスの胸に軽く触れ、レレミア直伝のとある神通力を使った。神和ぎでは使ってはならないとされている、破壊の神の力。その中でもシファが使ったのは弱い魔物であれば問答無用で即死させる程のもの。ティグルスであつても瞬時に混濁し、意識を失って崩れ落ちた。

シファは短時間で精巧な鏡を作り出していた。薄氷の裏に薄い銀。自然界でそれほどのものはないのだから、鏡の境目で多少背景がズレていても、ティグルスは鏡に映ったシファを見ているのだという発想すらできない。

そろそろかな、と呟いたシファはある一方に掌をかざす。

「tr」

放たれる火炎の渦。それに直撃するように、ティグルスがぐわえた丸太で土壁を粉碎しながら突撃してくる。直前まで視界が塞がれていたのだから、当然ティグルスは避けることができず、全身を焼く火を消すため地面をのたうち回る。

かわいそうだが死にはしない。シファはレレミアとの修行の最中にもティグルスを燃やしたから知っている。雨の後でなければあの毛皮はとも燃えやすい。ちなみに毛はすぐに生えて元通りになる。

あと二匹。シファの方針はすでに決まっている。

シファは斜めの土壁を駆け上がり、針を避けて残ったティグルスの方へジャンプする。こうやって圧力をかけて逃げてくれれば良いのだが、そういう結末になったことはない。仲間……というよりライバルがやられて警戒しているのか、二匹でシファを挟み込む位置取りをしている。

「oxy」

シファは樹木の神の名を呼んだ。それより上位の創造の神が近くで寝ていることは気にしない。

危険を察知したティグルス二匹が飛び上がる。地面から何本もの蔦が伸び、彼らの動きを絡め取るように成長し続ける。最高速で複雑な動きをしても何回も足を絡め取られ、引きちぎるのを繰り返す。振り切るのを諦めた二匹が、蔦を

最低限回避しながらシファアに向かつて走ってくる。

「oxo oxo oxo」

シファアの足元から、さらに多くの藁が伸びる。懸命にもがいて藁をちぎり、シファアに攻撃しようとする二匹だったが、高速な再生力を誇る藁数千本に締め上げられてしまつてはその怪力を持つても動くことはできなくなり、爪がシファアに届くまであと一歩というところで、彼らは植物の塊と化した。

ティグルス二匹を動体視力だけで追い、植物を操って同じことをしたことはあつたが、二匹同時はさすがに初めてだった。予想よりも上手く行つて、シファアは胸をなでおろす。

「ふう……………」

朝から良い運動をした、と額の汗を拭つた所で、修行のことを思い出した。神気もかなり使つてしまつたし、ソルは寝てるし、どつしたものが。シファアはとりあえず例のごとく口に布を巻いて、移動しようとする。

ソルをおんぶしたところで、違和感を覚えた。異様な静かさだ。確かにティグルスにはこの森のどんな魔物も寄り付かない。だが風の音すら聞こえないのは絶対におかしい。

何か来る、とシファアが目にした先に現れたのは、見たこともないほど大きく、傷だらけのティグルスだった。

ヌシは幾つかの木を薙ぎ倒しながら、ゆっくり、ゆっくりと歩く。

人間以外で神通力を使えるのは神獣のみだ。だが、魔法を使うことのできる魔物は意外に多い。長く続いた戦争の時代、魔法使いたちの王が戦力を増強するためにそういう魔物を造り出したからだ。

神和ぎたちの住む地域、白域に住む魔物は、魔法使いたちの住む地域、黒域

に比べて非常に弱い。だから魔法を使う、上位に属する魔物をシファアは見たことがなかった。

それでも、ヌシの魔物としては桁外れの魔力量を感じてしまつては、恐怖せざるを得ない。

あまりにヌシの動きが緩慢としているものだから、シファアは口の布を取つて神通力を使うようにする機会を逃した。少しでも気を逸らさうものなら、彼の攻撃への対応が間に合わない。

要は、ソルを見捨てて逃げるか、特質を発動させるか、の二択のみがシファアの前に転がっていた。

別に、ソルを守る必要はない。こんな魔物にやられるわけではないのだから。でもそれで本当に良いのだろうか。

シファアの中で考えがぐるぐると巡り、やがて――。
彼女は前に出た。ヌシの前に立ちふさがるように。

自暴自棄ではない。

賭けでもない。

無謀でも、蛮勇でもない。

二ヶ月の特訓で、シファアは見違えるように強くなった。ティグルス二体を相手取り、助けがなければ神獣の子ども一頭すら助けられなかったのに、今やティグルス四体を圧倒できる。

イルは言っていた。自分を信じて自分の力を振るうのが特質だと！

きつと今が、その時だ。

「ははほひつ！(ハあ来いっ！)」

ヌシが両前足の爪で切り裂いてくる。凶体が大きくなつても同じこと。何回

も見てきたその攻撃に対し、シファは反撃、防御、回避、あらゆる状況を思い浮かべ、そして。

「つつつつつつつつ！！」

ヌシの攻撃が直撃し、呆気なく吹っ飛んだ。宙を舞い、美しく二回転。そのままに叩きつけられる。

全身が痛……くはない。痛覚が麻痺しているのか、胴から下が切り離されているような感覚……がしない。

シファが不可解なほど明瞭な意識の中、恐る恐る目を開けると、そこには無傷の自分の身体があった。

攻撃した側であるはずの、ヌシの苦しそうな雄叫び。見れば、相当な硬度を誇る爪が割れ、肉球がズタズタに引き裂かれて出血している。

「……」

けれど。そんなことが些細に思えるほど、謎に満ちた物体がシファとヌシの間に浮いている。

「あなたは……」

見たこともない生物。まんまるで、ふわふわで、雪のように白い。尻尾と耳がぴこぴこ揺れ動いている。羽根どころか手足も見当たらないのに、浮いている原理はわからない。

「ちゅー」

くるりと振り返ったその生物は一言鳴いて、つぶらな目でシファを見つめた。

○あとがき

こんにちは。こんばんは。初めましての方は初めまして。「ス」です。

今回は、というより前々回くらいから暗礁に乗り上げています。いつもは無理をして書き始めれば途中で覚醒するのですが、このところそれがなく、大変きついです。

なので、普段は絶対に、ぜつつつたいにしない、音楽を聞きながら原稿を書くということをしてみました。

するとどうでしょう、みるみるうちに筆（キーボード）が進むではありませんか。びつくりしました。

ちなみに聞いている曲は「mozell」という方の「バンド」という曲のピアノアレンジです。最初から最後まで、今もこの曲を聞きながらやっています。

もともともちゃくちゃ好きな曲だったのですが、まさかここまでとは思いませんでした。

さて物語がそこそこ進んでいきます。文字数は少ないですが、話自体はまあそこそこですね、そこそこ。前作くらいの勢いで書いていけばなあ、と思ったりするのですが、ここのヶ月くらい余りにも書けなかったので、ネガティブに陥りました。

正直、物語がクソなんじゃないかとか、これ面白くねーだろとか、書く意味ある？ とかいろいろなことを思いましたがいざ一時間千文字のペースを取り戻してみるとそんなことはなかったです。

「このまま勢いに乗って（乗らない）、夏休みの間に書き貯めて（しない）、九月号に備えたい（備えない）ものですね！

ではまた次回。

甘い夢の匂いがした。

愚人、ヤコブソンを嗤う

矢野ヒカル

教室の中で住み分けができています。中心となる元気で明るい奴ら、中間層、オタク連中、ぼっちの僕。大体その枠組の中で会話し、繋がり合う。でも、星咲さんだけはそんな垣根を超えて、全員に態度を変えることなく接してくれる。

「ねえねえ、なにしてるの？」

クラス最下層の僕にも。

「次の時間、漢字テストの勉強を」

「あっ！ 忘れてた！ どこが出るんだっけ？」

「このページだよ」

成績優秀な彼女が忘れるのだろうか、忘れても成績優秀なのだろうか。

「ありがとね」

分け隔てない笑顔。背中を叩かれる。

「う、うん……」

女性に慣れていない僕にはとても刺激的だった。

彼女はくると大げさに身体の向きを変えて、自分の席へ戻っていく。

運動部でスタイル抜群。雑誌の読者モデルにスカウトされたとか？ よく笑う可愛い顔。勘違いしてしまいそうになるボディタッチ。

男なら、どうしたって気になってしまう。

でも、僕は、彼女にあこがれを抱きつつも、どこか恐ろしいものを感じていた。

「星咲さんいいよな」

クラスの馬鹿男子達の会話。僕は会話の中にいないけど、本を読みながら耳を傾ける。

「可愛いし、スタイルいいし、なにより巨乳だし」

「そこかよ！」

「やっぱりそこでしょ！！」

「ワハハ」

馬鹿みたいな会話、まあ、同意するけど。

「外見しか見れないとは、悲しい奴らだな」

「お前だってそうだろ！ 席が隣だけで」

「席が隣だとわかることがある」

「なんだよ？」

「星咲さん、めっちゃいい匂いするんだ……」

「……変態かよ」

「マジで。あれはフェロモンだよ」

「俺は分かるよ。すれ違った時に思わず深呼吸しちゃったもん」

「このクラス変態ばかりです！！」

「ギャハハ」

「明日席替えだろ？ 隣になりてえわー」

いい匂いがするのは、まあ、同意するけど。

でもあれは彼女の匂いであって、フェロモンじゃない。

そもそも人間にはフェロモンを受容する^{じよび}鋤鼻器官が退化しているから感じようがなかったはず。
……なんて、受験には出てこなさそうな参考書の端っこに書かれたことを思い出した。

その日の夜、自室で僕はパソコンを触っていた。

お気に入りのサイトを見に行ったり、いろいろと検索ワードを変えてみるけど、どうしてもしっくりこない。

頭に浮かんでくるのは、星咲さん。

「しょうがないよな。今日は挨拶だけじゃなかったし」

パソコンを消して、想像の星咲さんと戯れた。

「井上クン、よろしくね」

翌日の席替えの結果。窓際の一番後ろが星咲さん、隣が僕。

男子からの視線が痛い。こんな、星咲さんを独り占めしてしまうような席になるなんて。

「……よろしく」

まあ、でも、隣になったからって、特に何も無いわけで。

チラチラと横目で見て、夜に星咲さんを想う回数が増えたくらい？

その程度。

席替えから一週間ぐらい経った。以前より会話が増えた。と言っても、次の授業眠たいね、とか、体育楽しみ、とか、楽しみにしてたのに雨降ってきて筋トレだったからしんどい、とか。そういうの。

「ふわあ……」

「寝不足？」

「う、うん。……漫画読み返してたらとまらなくて」

嘘。

「そんな井上クンにはこれを差し上げよう。ジャジャン」

へんてこな効果音とともに洒落な小瓶が出てきた。

「これは？」

「リラックス効果のあるフレグランスミストだよ」

「フレグランスミスト……？」

「ざっくり言うと香水だね。お部屋にも使えるやつ」

「そんなのあるんだ」

お洒落な人は持っているものが違う。

「これ使おうとスッキリ快眠ですよ」

通販の番組っぽくふざけて言う。

「でも……、悪いよ」

「おっと、人体には安心安全、完全合法のブツですよ」

なんだか怪しくなった。

「そっちじゃなくて……、えっと、いくら？」

「やだなあ、お金はいらぬよ。私と井上クンの仲でしょ」

いつの間にそんな仲に？

「じゃあ、おためしで使ってみるよ」

「お買い上げありがとうございます」

「結局お金とるの」

「冗談冗談」

「香水なんて……似合わないな」

夜、部屋で一人香水と対峙する。

正直、僕の手に残る物だけど、星咲さんがくれたものだから使ってみる。

「あ、いい匂い」

匂いに包み込まれるように、ぐっすりと眠ることが出来た。

「ねえねえ、どうだった？」

朝、挨拶もそこそこに昨日のあれについて聞かれる。

「とてもよかったよ。なんか、上手く言えないけど」

「よかった」

「しばらく使ってみるよ」

数日後、地理の授業前。

「あー、教科書忘れちゃった」

「星咲さんでも忘れ物するんだね」

「あはは。井上クン、もしよかったらだけど……」

「見る？」

「ありがと！ さすが親友！！」

一気にランクが上がった。

机をくっつけて、二人でひとつの教科書を共有する。

そうすると当然星咲さんとの距離も近くなるわけで……。

「どしたのさ」

「な、なんでもない」

なんだかすごくドキドキしてしまう。

近いから、視界に入るだけじゃなくて、星咲さんのいい匂いが……。

あ、この匂い、香水と同じだ……。

部屋だけじゃなくて、服にもつけてるのかな？　なんて、気になったけど、そんなことは聞けず。

毎日の香水による快眠&すぐ隣に星咲さんがいるというこの状況。眠たいだけの地理の授業も今日はしっかり起きています。内容が頭に入ってるとは言わないけど。

近い距離、ちょっと触れる肘。

先生の説明が教科書の右上に移る。

僕は視線の移動だけでいい。星咲さんはちょっとこっちに寄ってくる。

その時、僕の肘に柔らかな感触が。

頭が沸騰しそうになる。

星咲さんは気付いてない。

指摘する？　いや少しこのままで。

こてっ。

「あっ……」

星咲さんが机に落ちた。突っ伏して寝てしまってる。

せっかく教科書を共有してるのに、寝てしまうなんて。人によっては失礼と感じるかもしれないけど、星咲さんがやるならなんとなく許せてしまう。

教科書が半分見えなくなってるけど。

それはちょっとと思い、肩を叩いてみる。

……。

起きない。あ、同級生の女の人に触るなんて初めてかも？

それにしても。

この状況はまずい。

無防備に寝る星咲さん。僕の左肘には胸が当たってる。

隣の席の役得なんてレベルを超えているのでは？

でも、あと少しだけ？

5分後。彼女はまだ起きない。

彼女の香り、感触。

僕は少しだけ左に寄った。

「やー、ごめんごめん。すっかり寝ちゃってた」

「い、いや、いいよ」

「ごめんね、せっかく机くっつけてもらったのに」

謝られても、むしろありがとうと言いたくなる。

夜、もはや日課になった香水をかける。

いい匂いがする。

星咲さんの匂いが。

熟睡する彼女を思い出したら、僕も眠たくなってきた……。

その日の夢に、星咲さんが出てきた。

朝、スッキリして目が覚める。少しの不快感とともに。

授業を受ける。星咲さんはまた教科書を忘れたみたいだ。

彼女の匂いがした。

その日の夢に、星咲さんが出てきた。

次の日、星咲さんが転んで僕の上にかぶさってきた。

彼女の匂いがした。

その日の夢に、星咲さんが出てきた。

土日は学校がない。僕は部屋で香水を振りまいた。

その日の夢に、星咲さんが出てきた。

休み明け、星咲さんが僕の隣の席に座る。

彼女の匂いがした。

その日の夢に、星咲さんが出てきた。

そのまま数週間が経過した。

夢の中の星咲さんと、僕はまるで恋人のような、

特別な関係のような、

あるいはいつもの関係のまま、過ごした。

隣に星咲さんがいる。

彼女の匂いがする。

ここは僕の部屋。

静寂。

だから僕は、いつも通り、彼女に手を伸ばした。

ぎゅつ。

手を、掴まれた。

彼女は笑っていた。そうだ。彼女はいつも笑顔だった。

その笑顔と全く異なる、僕が初めて見る笑顔だった。

彼女の匂いがする。

ここは僕の部屋ではなく教室。

授業中の静寂。

そんな一コマ。

僕と、星咲さんのワンシーン。

授業後、星咲さんは席を立ち、教室を出る。

僕はその後ろを、周りの人間に気づかれないように、着いていく。

人気のない廊下まで、歩いて行く。

「井上クン。さっきのやつ、ああいうの、駄目だと思うんだ」

いつになくしおらしい。

「……」

「そういうのは、ね」

「……」

僕の頭は冷静になっていた。

手を掴まれたあの時から。

考えた。

ああ、久しぶりに頭を使って考える気がする。

もしかすると、という考えが思い浮かぶ。

夢は記憶の整理する際に見るものらしい。経験したことを、どうまとめているのかは知らないけど。見るもの、聞こえるものだけじゃなくて、触った感触とかも記憶に含まれる。

そして、匂いも。

彼女の匂い。香水の匂い。

その2つを関連付けると。

夢を操作できる？

そんな可能性。仮にそうだったとして、彼女がどうしてそんなことをするのかということが……。

「星咲さん、君は。僕を、どうしたいんだ？」

「どういう意味かな？」

「もし君が僕に夢を見させて、君は……」

「井上クンのギラギラした目」

僕の言葉を押しつぶすように語った。

「他の子もそうだったけど、井上クンの目は特にいいね。視線に遠慮がないというか」

「でも、駄目だよ。見てもいいけど。触れちゃ駄目なの」

「理由？ 理由なんてないよ。わからないもんね。君には」

「だから、おさわりは厳禁。私が寝ている間に肘先で突つつくのは、まあ、セーフかな」

口元に指を当てて、いつもと違った笑みを浮かべる。

僕の目の前にいる人は誰だ？

「でも、その代わり……」

彼女が近づいてくる。

耳元で、そっと。

「夢の中では、なにをしてもいいよ」

星咲さんの匂いがした。

嗅ぐだけでくらくらするこの淫靡な匂いは決してフェロモンではなく、夢で彼女と出会うための記憶の断片。

彼女に触れられるのは夢で、現実では触れることは叶わない。

とすると、夢での彼女との逢瀬は無為なものか。

それでもまた今日も香水を使ってしまう。

僕はとんでもなく愚かだ。

あとがき

愚人、ヤコブソンを嗤う(ぐにん、ヤコブソンをわらう)

フェロモン物質を感じ取る^{じよび}鋤鼻器官、またの名をヤコブソン器官と言います。まあ、人間の鋤鼻器官は退化してるので、フェロモンは感じ取れねーよっていうあれですけど。でも、それでもフェロモンのなあれは感じてしまうわけで。本作です。